2004年 ネパールワークキャンプ報告

フレンズ国際労働キャンプ関東（FIWC関東）

ネパールの山奥、ドゥリシェニー村。一年前初めてこの村を訪れ、幼児教育の学校を建てた。村人たちと歌い・踊り・笑い・そして泣いた。「みんな元気かなぁ・・・」一年間村人たちのことを考え、心配した。電気もガスもなく人里離れたこの村に再び戻ってきたキャンパーはその再会に涙し、初めてこの村を訪れるキャンパーはその歓迎に感激した。村は明るくて暖かい。

今回のワークはトイレ作り。村にトイレはなく衛生状態が悪い。村人と共に穴を掘り、岩を運び村にトイレを作ろうと奮闘し・・・結局トイレはキャンプ中に完成することはなかったが、一緒に働くことでいろいろなものが生まれた。それはキャンパーの、そして村人の心の中に様々な形で生まれ決して無くなることはない、何よりも頑丈で大切なものであるだろう。あ、もちろんトイレも今頃は完成して使われてますよ。

ネパールワークキャンプ報告書　目次

日程　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊2
ＯＫバジとは？　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊2
ワーク　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊3
レク　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊3
日本食　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊4
古着配り　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊4
ＯＫバジ１０周年式典　＊＊＊＊＊＊＊＊＊4
ファンドについて　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊5
キャンパー紹介＆感想　＊＊＊＊＊＊＊＊＊6～7
その他　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊8

日程

2月25日
カトマンズ、レッドプラネットホテルに集合。

2月26日
ストライキのため動けず。

2月27日
ストライキのため動けず。ティミ村の知的障害者の学校で草刈などのワーク。

2月28日
カトマンズからタンセンへバス移動。OKバジと合流。

2月29日
タンセンからジープでリンネルハへ移動。途中サラスワティという村の学校で交流会。リンネルハでも学校で交流会。リンネルハから徒歩でドゥリシェニー村へ。7時30分ドゥリシェニー到着！村人たちから花輪や踊りなどで歓迎を受ける。

<ドゥリシェニー村>

3月1日
ワーク開始。3つのグループに分けて穴掘り。学校のトイレ、校長の家のトイレ、ミンさんの家のトイレの3つ。

3月2日
学校の横の穴が掘り終わる。校長の家のトイレは大きな岩が出てきて苦戦する。他の班からも人が集まり岩を少しずつ砕きながらの作業。夜、歌・踊りで盛り上がる。

<穴掘り開始>

3月3日
3班とも穴掘りがほぼ終わる。お母さん、子供たちと共に岩運び。ドコナムロを使って運ぶが始めのうちは慣れず、辛い。

3月4日
班は関係無く学校のトイレの岩運びをする。それとは別にもう1つトイレ用の穴を掘り始める。

3月5日
近くの川へピクニック。と言っても急な山道を徒歩1時間・・・。川ではヤギを絞め、水浴びをする。この日は良い休憩の日となるはずだったが皆逆に疲れる。

<ドコナムロ>

3月6日
この日はネパール全土でホーリー祭が行われる日。私たちは隣村のサチコールに招待され、そこで祭りを味わった。ホーリー祭は色水を掛け合うことで有名だが、村ではそれをせず皆が歌い・踊る。私たちも一緒に踊り、おでこには赤いティカという粉を付け真っ赤になる。学校ではバレーボールで村人と対戦。

<ホーリー祭>

3月7日
この日、サチが日本に緊急帰国。またサチン、デブがカトマンズに戻ることになったが、ワークは残ったキャンパーによって進められる。夜、垣見さんの講演会を行いキャンパーは垣見さんの話に酔いしれる。

3月8日
石運び。運んで運んでまた運ぶ。

3月9日
朝旧学校を見学。キャンパーの宿泊のため子供たちは新しい学校が使えなかったので、使っていた一部屋を空けることにした。この日は日本食&古着配り&レクのお祭りのためワークは午前中だけ行った。ペンキが届いたので半分はペイントを、半分は午後のお祭りの準備をした。日本食は村人にとても喜ばれ、あっという間になくなった。古着配りも大盛況。しかし時間がなくなり用意していたレクはできなかった。その勢いで夜は村人と盛り上がる。

<流しそうめん>

3月10日
石運び班とペイント班に分かれてワーク。ペイントは追加で頼んだペンキが間違って届き唖然・・・。仕方ないので急遽絵を変更。この日は美帆さんの誕生日。夜、パーティーを開いた。美帆さん〇〇才おめでとう！

<ペイント開始>

3月11日
ワーク最後の日。学校の生徒に手形を押してもらいペイント完成！！予定とは違う絵になったが、村人には大好評。トイレは結局1個も完成せず・・・。午後はパッキングのためワークは休み。

3月12日
ドゥリシェニー村最後の日。朝最後のお茶を飲み8時過ぎにドゥリシェニー村を出発した。最後まで村人は優しくキャンパーを見送ってくれた。リンネルハまで歩き、そこからジープでランプールへ向かう。途中所々で人々の歓迎をうけ、ランプールまで結局6時間かかってしまった。ランプールはOKバジ10周年式典のためお祭りムード。

3月13日
OKバジ10周年式典。この日の為にいろんな村から人々が集まり最終的には1万人以上の人が集まったらしい。キャンパーもステージに上がり表彰を受けたり、大根踊りをしたり。村人もキャンパーも思い思い楽しみ、OKバジに感謝の意を表した。

3月14日
朝、村人に「バザールに行くか？」と言われ当然市場へ行くものだと思い数名が同行した。が・・・なんとバザールとは近くにある地名で一同呆然。その後ジープでタンセンへ向かった。途中、一台のジープがパンクしたり、崖に突っ込みそうになったりと最後まで険しい道のりだったが、無事タンセンに着きキャンプ終了！・・・・のはずだったが大変だったのは実はこれから。いずれ報告します

<OKバジとは？>

今のネパールキャンプにかかせない人、OKバジこと垣見一雅さんだ。彼がパルパ県ドリマラ村に住み始めたのは10年前、それ以来村を歩き、村を見て、村人と話し、村人が困っていることに手助けをしてきた。そんな彼に惚れ、沢山の日本人が彼の働きを応援した。そしてもちろん村人たちも彼を信頼した。

私たちもそんな彼に惚れた一人である。私たちネパールキャンプはOKバジを通して今回のキャンプを開催することができた。

わ～くきゃんぷ

トイレの作り方

① 穴掘り

ドウリシエニー村にはもちろん下水処理設備などないので、トイレを製作するうえでは、便をためておく必要がある。そして、そこで堆肥化され、農作物への肥料などとして利用させるのだ。

今回のWORKでは、各家々に対して1つずつのトイレ作成と加えて、前回建てた学校用の公共トイレの作成であった。そこで、まず私たち14人を3つの班に分け、学校の公共トイレ班と2つの私用トイレ班に分かれて作業することにした。

便をためておく用の穴のサイズは、1．5m×1．5m×深さ1．8mというかなり大きなもので、このサイズであれば約7年間使い続けられるそうです。

この作業は思っている以上に過酷。土はとても乾燥していて固く、勢いよくシャベルとつるはしを動かして掘り進めるものの、ほんの数分後にはバテバテになってしまう。日本人キャンパーは自分の非力さを痛感したことでしょう。

時々様子を見に来てくれるユースクラブのネパール人や村人たちに手伝ってもらうことでなんとか掘り進めることができた。

② 石運び

便をためておく穴は、掘り終わって完成などということはもちろんない。きちんと石を積み上げることで、適当な隙間を作りながら壁を作らなければ、水分や便自体が土のなかに吸収されてしまうのでうまくない。ですから、次の作業は壁の材料となる石や岩を山々から運んでくることだ。トイレの壁を石で作る作業は熟練の業が必要なため、ネパール人大工さんが担当した。

石を運ぶためには、ネパール独特のかご「ドコ・ナムロ」を使う。しかし、ドコ・ナムロ扱いに不慣れな日本人キャンパーたちはもちろん大苦戦。初めは、小さい石を数個運ぶだけで、「首が痛い」だとか「かなり辛い」だとか言っていたのだ。だが、コツをだんだんつかむようになっていくと、最終的には女性でも大きな石でも平気で運べるようになっていた。

3ヶ所の穴掘りが終わると、もう1ヶ所のトイレの穴掘りを開始したが、結局この2つの作業を繰り返していた。

〈ペイント〉

①下書き

予定していたトイレ作り以外に、OKバジ（垣見一雅）さんのご厚意により、前回のWORKで作った学校の外壁にペイントをさせてもらうことができたので、これも今回のWORKに加えた。学校は教室2つ・職員室（倉庫）1つの構造のため、おおきく3つのブロックに分けて、ペイントすることにした。

デザインは大きな花をイメージしたもので、花の中央には、村人とキャンパーによる手形で埋め尽くしたものが1つ、地球が1つ、そしてもう1つはキャンパー個人個人が様々な絵をえがいたものである。下書きには、ペンなどもちろんないので、木炭を作り、それを利用した。

②色塗り

ユースクラブの人にペンキの購入を頼んでいたのだが、キャンパーが希望していた色の一部がお店になかったということで、お店の人が勝手にシルバーを売りつけてきたため、計画していた色がそろわないというハプニングが勃発した。さすがネパール…。

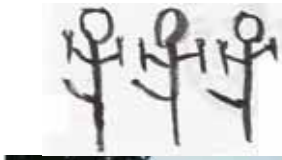
しかしそのハプニングも、シルバーをたくみに使うことで、クリア。トイレ作りの工程その②・石運びとこの作業を、キャンパー内でうまく交代しながら行ったので、そんなに時間もかからずに完成した。

レク

レクでは主に桃太郎の劇をおこなった。ネパールでは、お姫様がさらわれてそれを正義の味方が助けるという内容が非常にうけるらしく、無理やり桃太郎にお姫様を登場させるなどして内容は自分達で工夫した。また村人との交流もレクの大きな目的であったので、劇に子供たちも参加してもらうようにもした。劇中の言語は、日本語を英語にして、それをサチンやリットマンにネパール語にしてもらった。

他には、ネパールの代表的な民謡『レッサムフィリリ』を歌い、それにあわせてネパリーダンスをしたり、東京農大名物の『大根踊り』を踊ったりした。ネパール人は非常に陽気で歌って踊るのが大好きなので、大人から子供まで大声で参加してくれた。さらに特別にレクの時間をとらなくても、夜になると子供たちが日本人キャンパーのもとへ来て、民謡を歌ったり踊ったりしてくれ、キャンパーもそれに応えておおいにはしゃいだ。

また村人たちとバレーボールの試合をさせてもらった。しかしネパール人の驚異の身体能力により、日本人キャンパーは完敗した。近い将来ネパール代表がオリンピックにでることがあると思えるほど、ネパールではバレーボールがさかん。



日本食

◆ そーめん

「流しそうめん」をしました。竹を半分に切り、中をくりぬき、何本か接続し、その中にそうめんを流すというおかしな光景を目の辺りにし、日本の味＋珍しさからか村の皆には大人気であっという間になくなりました。しかし、流しそうめんがうまく流れていかなかったり、村人がタレをゴクゴク飲んでしまったりというハプニングも・・・。

◆ おしるこ

豆を煮る段階から村人が何度も見に来るなど、特に期待の日本食でした。出来あがり直後、長蛇の列ができ、白玉はすぐに無くなってしまい、一人一杯、という決まりを作りましたが、何度も並ぶ村人もいて、配膳担当のキャンパーは苦労したと思います。

後で聞いた話では、白玉入りおしるこを味わったキャンパーは一人もいなかった様です・・・。あ、自分食べました(まさ)

◆ ちらし寿司

寿司好きなネパール人を魅了した一品でした。日本米の炊き方を覆すネパール式で、それは見事に炊き上がりました。配膳担当のキャンパーは手を寿司まみれにしながら、満面の笑みを浮かべ、村人達と一緒に食べている姿が非常に印象的でした。

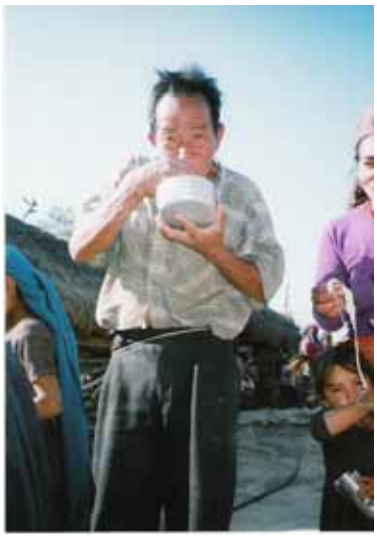
◆ ひじき

ひじきは乾燥物を持って行き、水に戻す段階から作り始めました。ネパールの人にとって「ひじき」は今まで目にしたこともない不思議な物体。「なんかの実？草？ヒル？？？」触ってはコソコソと何かを話していました。その黒い不思議な物体「ひじき」の配膳が始まると、すぐにはなかなか手を出さなかった村人達ですが、終了する頃には「ひじき」ファンがいっぱいに。

〈日本食感想〉

愉快なハプニングもあり、課題も沢山残ったと思いますが、キャンパー、ユースクラブ、村人達が一同に協力し合って、日本食は大盛況に終わりました。助っ人のヨウコさん、タクさん、そして、嫌な顔1つせずに面倒な手伝いをテキパキとやってくれた皆、本当にありがとう。

(日本食係一同)



古着配り

村人達は現金収入がほとんどないためにほとんど服を買うことができず、ほとんどの人はぼろぼろの服を着て、中には服を着ない子供もいます。

そのため日本から古着を持って行き配りました。古着はキャンパーが集めたものをはじめ、OB・キャンパーの友達・家族などからの協力によって集めることができました。

配り方はくじ引きで各家庭に公平に渡るように配りました。各家庭に5・6着ずつ渡り、古着と共におもちゃなどの雑貨も配りました。

古着配りは大盛況で、子供も大人も喜んでいたようで、早速その場で着替える村人、後日着替えて自慢してくる村人もいました。

かなりの量の古着が集まったため、ドゥリシエニーだけでなく、半分の古着を隣村のブトゥケという村にも古着を渡しました。

OKバジ10周年式典

3月13日、パルパ県内ランプールにおいてOKバジ活動10周年式典が開催され、式典に私たちも出席することになった。ランプール、またランプールの近くの村ではいたるところに式典を記念する旗が飾られていて祭り一色ムードだった。

メインイベントの一つのバレーボール大会のため前日から県内のチームが試合をし、式典当日に行われる日本から訪れた「日本の女子高校の全国大会優勝チーム4人」との試合の出場権を争っていた。

式典当日は朝早くから多くの人でごった返していた。ネパールでこれだけの数の人を見たことは無くOKバジの人柄の良さや人望の厚さを実感した。

式は、村人によるOKバジの表彰式から始まりその後村人たちからOKバジに対しての感謝の気持ちを込めた記念品の贈呈式などが行われた。ネパールキャンパーリーダー、われらがマサも去年・今年の活動を讃えられ表彰状を頂いた。また式では様々なパフォーマンスも披露され、私たちも東京農業大学名物「大根踊り」(注)を披露し、大盛り上がりとなった！いよいよメインイベントであるバレーボールの

試合が始まった。日本代表VSネパール代表。式典と並行して行われ式そっちのけで皆バレーボールに夢中になった。

この式典はランプール始まって以来の大イベントであり私たちを含め参加者は思い思いに楽しんでいるようだった。

この式典を通し、改めてOKバジの10年間の地道な草の根活動が村人に大きな力を与えたか、またその草の根活動が十分すぎるほどの意味を持ち、現在では必要不可欠なものになりつつあるのかを思い知らされた。またOKバジのこれだけの偉業を目の辺りしたにもかかわらず、人徳の厚さ、人柄の良さ、少年のようなきらきらとした瞳を感じた。

OKバジという一人の日本人を通して日本とネパールがまた一歩近づいた、そんな素敵な祭典だった。そんな式典に参加できたことを光栄に思う。

㊟リーダーまさとひでは農大生、ゆかりは農大卒。

＜式典で頂いた感謝状＞

¥ファンドRs

2003年のワークキャンプ後OKバジから届いた手紙に「村人に兄弟、両親ができました」と書かれていた。様々な支援の形があると思うが10年間村で活動してきた彼はこの感覚を望む。継続的な支援を行うことで実際に建てた建物以外にもキャンパーと村人の関係の深さ、という大きなものができる。しかしワークキャンプで同じ場所に何度も訪れることは他の村との差が出来、必要のないものを作るということを招くことにもつながり、限界を感じる。ネパールではファンドを作り年24％の利息で運営することができ、これは現金収入のほとんどない村人にとって大変役に立つ。今回私たちは3万ルピー（約4万8千円）のファンドをドゥリシェニー村に対して作った。このお金は学校の維持費、トイレの維持費、病人の治療費等に使われ、運営は地元のユースクラブによって行われ、使い道は皆で話し合い、毎年2回のレポートを日本に送ることを約束した。

ネパールキャンプ4度目
伊藤祥江。
ネパールキャンプへの思い

キャンプに参加して毎回同じことを考える。このキャンプは本当に必要だったのか。お金も技術もない私たちが行ってできることは限られているし、そもそも何かをつくって帰ってくるということ自体、問題を多く含むことなのではないか。また、私たち自身や私たちのつくった物がキャンプ地の人々やその生活に与える影響はどのようなものなのか。キャンプ後の支援はどうするか。したほうが良いのか悪いのか。するとすればどのような方法でするのがいいのだろうか。こんなことを考えること自体失礼なことなのだろうか。など、他にも漠然としたことから細かいことまで考え出すときりがなく、答えが見つからないまま4回のキャンプが終わった。

色々悩みながらもやっぱりキャンプというと行ってしまうのである。それは、ワークキャンプが私にとってとても魅力的なものだからだと思う。本当に素敵な人たちとたくさん出会えるし、仲間たちとは、一緒に2・3週間生活するとまるで家族のように仲良くなってしまう。キャンプ地やそこに住む人たちのことは、ドゥリシェニーキャンプでお世話になっている垣見さんがよく「遠いところにいる家族のように兄弟のように」というお話をしてくださるが、本当にその通りで、今回は特にこのことを強く感じた。前までのキャンプ地のティミに行っても、前回からのキャンプ地のドゥリシェニーに行っても、一年ぶりに会うにも関わらず、すんなり受け入れてもらうことができ、一年前に別れたときと同じような感覚で時間が過ぎていく。しばらく帰っていなかった実家みたいな感じである。その上、大歓迎され、本当に喜んでもらえるのを見ると、自分がまた会いたいと思っていた人たちに再会できる幸せをとても強く感じることができた。

自分がネパールでしてきたことをワークキャンプというものを知らない人に話すとき、最終的にボランティアという言葉に行き着いてしまうことがよくある。説明してもよく分からない顔をしていた人たちが「あぁ、ボランティアのことか！」と霧の晴れたような顔をすることが多い。しかし、実際にはボランティアという感じではなく、言葉で伝えきれないことが多くあるワークキャンプはやっぱりすごいなぁと思う。

何が良くて何が良くないかは分からないし、ずっと考えていかなくてはいけないことだと思うが、この前垣見さんが「まず向こうからの要望があり、それで行なったプロジェクトは本当に必要なものが多いのではないかと思う。」と話してくれたのを聞いて、十年間ネパールに住んで活動しているバジさんが実際に見てそう思うんだからと少し安心した。これからどのような形でキャンプに関わっていけるか分からないが、自分なりに自分の考える方法でずっと関わっていきたいと思っている。

キャンパー紹介&感想

菅野俊昭（かんちゃん）

2度目のネパール、そしてドゥリシェニー村はとてもあたたかだった。去年も来たぼくを覚えていてくれただけでなく、「カンチャ!!カンチャ!!」とぼくのコトを呼んでまでくれたコトには感動すら覚えた。村人たちは常に明るい笑顔を浮かべ、ぼくたちに不自由のないようにゴハンを作ってくれたりワークを手伝ってくれたりと、様々なコトでぼくらを包んでくれた毎日がとても新鮮でとても刺激的な日々を過ごせたと思う。

伊藤祥江（サチ）

今回のキャンプは私にとってものすごく心に残るキャンプだった。遠い所にすむ大好きな家族たちと再会し喜んでもらえる嬉しさとその人たちと別れることのつらさを同時に経験した。個人的な理由で途中、突然帰ることになりみんなと一緒にキャンプを終わらせることができなかったことも本当に心残りだ。こんな気持ちにさせてくれるすっごくいいキャンプだったと思う。

伊藤洋（ヨウ）

自分の知らない世界があった。 自分のみたい世界があった。 自分が感じたかった空気・笑顔・人の温かさが村にはあった。村人や子供たちのキラキラと輝く笑顔に囲まれたキャンパーは幸せ者だ！！そして、その幸せなキャンパーの1員になれた俺は最高の幸せ者だ！！俺が村で教わったこと。それは、

「笑顔があればなんでもできる！！」

三上大次郎（ダイジロウ）

ネパールデレイラムロ。

ダンニャバードネパール。ナマステ。

岡田圭多（ケイタ）

初海外ってこともあり初体験をいっぱいしました。人の為に何かをすること自体あまりしたこともなく毎日が新鮮で常に経験値を積ませて頂きました。メシも旨いし、可愛い子に出会うし、メシも大盛りだし、ワークは正直辛かったけど日々ダラダラと過ごしていた自分にはいい刺激になりました。また行きたいと思ういい村、いい国だったと思います。

久保秀夫（ヒデ）

一、　流れる時間がゆっくりで変な感じ

二、　日本は物が豊か　ネパールは人が豊か

三、　電気なんか無くたってどうにかなる

四、　大切なのは言葉ではない！勢いだ！

五、　紙で拭くほうが面倒くさいではないか！ショック！

山川将弘（マサ）

三度目のネパールキャンプ。3 度目の参加でも新しい発見、新しい出会い、全てが新鮮に感じる。今年はリーダーという肩書き。準備は大変だし、報告もめんどくさいし、何かあったら大変だし・・・とは思わなかった。そう思わせない何かがワークキャンプに、そしてネパールにある。自分にとってネパールはそういう国でありワークキャンプはそういう場所だ。

高木康隆（ヤス）

ネパールキャンプに参加し、いろいろな人に出会い、いろいろな体験をさせてもらいました。 ドゥリシェニーで村の人たち、キャンパーと生活していると、気持ちが暖かくなっていくのを感じました。それを思うと、ボランティアをしていたのではなく、自分はボランティアされていたのだ、と思います。 本当にありがとうございました。ネパールキャンプ最高です。

立花ひと美（ヒトポン）

常にドゥリシェニー村の人々に囲まれて生活していた日々が忘れられない。言語・文化等の住む環境が全く違えど、私たち14人のキャンパーと村に住む16家庭の村人達は国境を越えた交流をしてきた。村人の1人1人の表情から行動まで、全てが私たちを他国に居るという気分にさせず、我々は日本と変わらぬ生活をしているように思えた。そうだ、私たちは国境を越えてひとつの家族になれた。

勝田彩子（アヤコ）

ネパールの人達は、日本や日本人が大好きです。私もこのキャンプに参加して、ネパールやネパールの人々が大好きになりました。国や文化が違っていても、言葉が通じなくても、人を思いやる気持ち、好きな気持ちがあれば十分。村人達からそんなことを教えてもらったような気がします。

小坂仁都美（ヒトミ）

前回とはまた違うネパール。静かに力強く生きている人々に出会いました。キャンプをとおして感じた村人のやさしさ、強さ。子供も大人もおじいちゃんもおばあちゃんも、澄んだ力強い目をしていました。村の人々に会えたこと、OK バジさんに会えたこと、そしてたのもしいキャンパーと 3 週間共にできたこと、感謝します。ありがとうございました。

土山直也（ナオヤ）

ネパールキャンプの感想文を 5 月 25 日に長野県の農家の庭で書くというのは変な気分です。野菜の苗作りや田植えや草取りを毎日気楽にやりながら時々ネパールのことを考えています。キャンプが終わってから2ヶ月しか経っていないのにドゥリシェニーでの出来事は遠い昔のことのように感じます。感想・・・じゃないかもしれないですね。

山川美帆（ミホ）

ネパキャン初参加で、か～な～り、不安いっぱいだったけど、本当に楽しかった。村の人達はコミュニケーションも ままならないのに、優しかったし、温かく私たちを迎えてくれた。そして キャンパーのみんな、みんなのおかげですごくいい経験ができたよ。サプライズバースデーも本当にありがとう。I RESPECT ALL MEMBERS.

稲垣佑花里（ユカリ）

ごく当り前の日常生活で村人が見せる笑顔、純粋な目、自然の中で伸び伸びと生きている姿が印象的だった。「ナマステ」と言えばはにかみながらも返ってくる「ナマステ」は、私にとって時に挨拶であり、ワーク時の励ましであり、交友の印の言葉にも聞こえ、とても大好きな言葉。様々な事を経験し、楽しいことだけではなく考えさせられること、またその中で得たものは大きく、他では得ることのできないかけがえのない思い出になったと思います。

サチン・マナンダール（サチン）

筋肉ムキムキのマッチョマン。しかし、ワークの方は・・・。ナイキのペンダントを着け、素敵な帽子をかぶり、おしゃれなメガネをかけ、ネパールファッションをサチンからたくさん学んだーる。

デヴ・チャンドラ（デブ）

ラジオが手放せない都会っ子。キャンパーのことを誰よりも心配したあの目線はちょっとおちゃめでかわいげがある。が31歳、いまだ未婚。

ＯＫバジ（バジさん）

バジさんに作り方を教えてもらい作ったダル(ご飯にかける豆の汁)はキャンパー・村人に大好評となり、その後そのダルは「バジダル」と呼ばれたそうな。ネパールを愛し、ネパールに愛される、心優しいみんなのお父さん。村人を見る眼はきらきらと光り、あふれる笑顔がとても素敵で魅力的☆

リットマン・カンムー（リットマン）

テコンドーではネパールチャンピオン！？英語がぺらぺらでキャンパーと村人との架け橋として重要な役目をもった。しっかり者で村人をまとめる。買い物でペンキを頼んだら全く違う色を買ってきてキャンパーから大非難をあびる。ロキシーが大好きなお調子者。

ダン・バハドゥール（ダン）

ユースクラブ一番の働き者。旨いダルバートは、彼の手によって作られた。陽気な笑い方が印象的な好青年でキャンパーに大人気。

プルナ・バハドゥール（プルナ）

バレーボールの達人。そして大食いの達人。バレーではキャンパーの腕に無数の青あざを作る程のエースアタッカー。しかし、ジャルパの代表チームでは補欠に甘んじる。目指せ！レギュラー！！

ナンダ・バハドゥール(ナンダ)

村には時々顔を出したレアな存在。一見女を魅了するマッチョの肉体を持つが、出っ張ったお腹も併せ持つ。革ジャンが似合うナイスガイ。

いとすばらしき
キャンパーかな

カンパ

今回のキャンプに寄せてたくさんのカンパを頂いた宮本久美子、新妻直美、青木淳、カヌスの会（ネパール料理パーティー）に参加して下さった方々、また古着集めにご協力してくださった矢部后代さんをはじめ多くの皆様方、またその他大勢の方々ありがとうございました。

順不同　敬を省略させて頂きました。

引き続きネパールキャンプカンパ募集しています。
郵便口座：記号、10220　番号 84286991　名義：山川将弘
（お振込みの際名前の後ろに「OK バジ」とご記入下さい）
ネパールキャンプ掲示板　http://6108.teacup.com/kumi/bbs

会計報告

キャンプ会計は以下の通りです。

収入

キャンパー参加費	168,000 円
カンパ	12,000 円
フリーマーケット	71,530 円
カヌスの会	63,000 円
計	314,530 円

支出

ワーク費	98,000 円
ファンド	48,000 円
準備費・雑費	110,945 円
計	256,945 円

ネパールキャンプワークキャンプ報告

製作：山川将弘（キャンプリーダー）

菅野俊昭（でかめがね兼サブリーダー）

伊藤　洋（愛用のランプは東芝L－11）

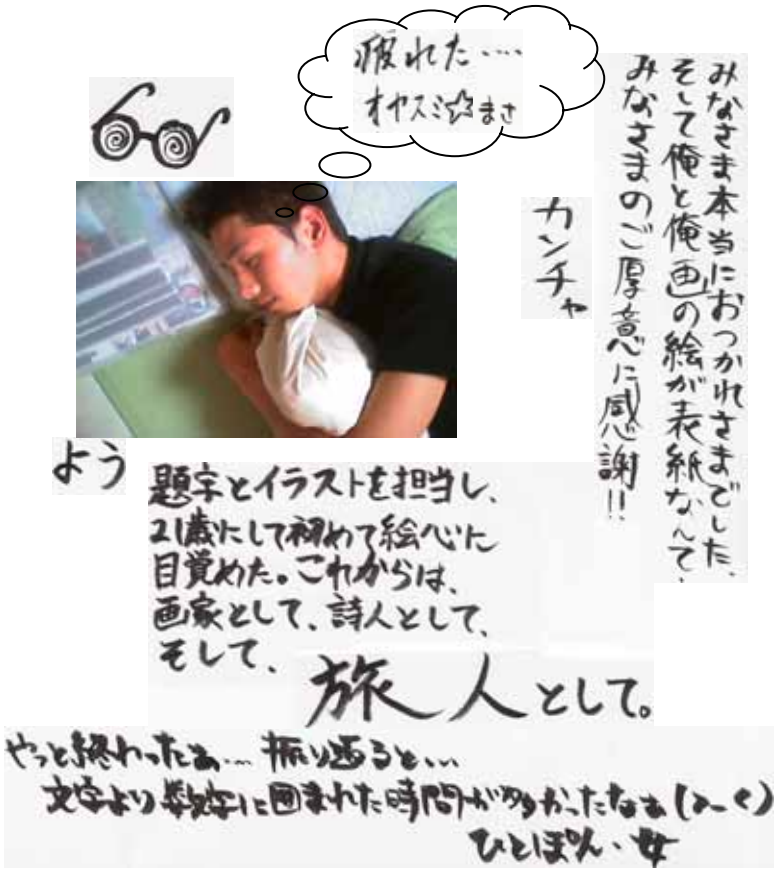
立花ひと美（ネパリーダンサー）

高木康隆（大リーガー）

「OKバジ」のご紹介

垣見一雅（かきみかずまさ）
1939 年、東京生まれ。1989 年からネパールに関わり始め、ネパールで暖かい村人に囲まれながら暮らすこと 10 年。村々を巡り村人の話に耳を傾け、そして日本の善意をネパールへ届ける「パイプ役」として草の根活動をしている。困ったことがあったらOKバジのところに行けばいい。村人からの信頼は厚く、人々は尊敬の意を込めて「OKバジ」（現地の言葉でOKおじいさんの意）と呼ぶ。

～編集後記～



フレンズ国際労働キャンプ（FIWC）関東委員会
2004 年 6 月 6 日発行
フレンズ国際労働キャンプ（FIWC）関東委員会
委員長：藤澤真人

キャンプ情報はモグネットへ
http//www.mognet.org/